

## 終助詞の関係意味論的考察 — 「ぞ」「ぜ」を中心として —

小野 晋 中川 裕志  
横浜国立大学 工学部 電子情報工学科  
E-mail: ono@naklab.dnj.ynu.ac.jp

### 概要

最近、談話における終助詞の働きに注目し、計算機言語学的な意味論を与えるという試みが盛んに行なわれるようになってきた。例えば、[TSS+90, Kaw91, Kin93]はそのような研究の例である。これらは「か」「ね」「よ」「な」に関するものであって、「ぞ」「ぜ」に関する説明はしていない。しかし、終助詞「ぞ」「ぜ」にも「か」「よ」「ね」「な」とは違った興味深い性質がある。そこで、本稿では、終助詞について、終助詞「ぞ」「ぜ」を中心に、考察してみた。

## Relational Semantics of Japanese Sentence Final Particles about *zo* and *ze*

Susumu ONO and Hiroshi NAKAGAWA  
Division of Electrical and Computer Engineering,  
Faculty of Engineering, Yokohama National University  
Tokiwadai, Hodogaya-ku, Yokohama 240, Japan  
E-mail: ono@naklab.dnj.ynu.ac.jp

### Abstract

Recently, the researches about computational semantics of Japanese sentence final particle(hereafter we call JSFP) have been proposed, for instances,[TSS+90, Kaw91, Kin93]. Although there are not less than ten numbers of JSFPs in Japanese, these researches mention the semantics of *ka*, *yo*, *ne* and *na*. We deal with the JSFPs *zo*, *ze* and try to formalize the semantics of these JSFPs semantics.

## 1 はじめに

終助詞は、文によって情報を伝えるにあたっての話し手の聞き手に対する態度を表し、日本語の会話に非常に頻繁に用いられる。この終助詞は、日本語文に非常に多く現れるゼロ代名詞の値を特定するときの重要な手がかりになり、また、この終助詞を無視して文の意味を正確に把握することは出来ない。そのため、終助詞の意味の基礎的な研究は不可欠である。終助詞「か」「よ」「ね」「な」についての研究には、[TSS+90, Kaw91, Kin93]などがある。これに対し、終助詞「ぞ」「ぜ」についての研究には [Mat69] があるが、これは言語現象についての記述であり、計算モデルには至っていない。そこで、本稿では終助詞「ぞ」「ぜ」を他の終助詞「か」「よ」「ね」「な」とも比較しながら考察し、その意味を提案する。ただし、本稿で終助詞「ぞ」「ぜ」の全ての用法を説明できるような意味を提案することは出来ないので、主張型の文に付加する用法を説明できるような終助詞「ぞ」「ぜ」の意味を提案する。

そして、終助詞「ぞ」「ぜ」を持つ文の意味とそれが導かれるプロセス、特に、ゼロ代名詞の内容が特定されるプロセスを明らかにする。

2節で終助詞の意味を示すのに必要な認知主体の態度に関する基礎的な概念を示す。3節で本稿の結果である終助詞「ぞ」「ぜ」の意味を示し、4節で終助詞「ぞ」「ぜ」を含む文の直観的な読みを3節で述べた終助詞の意味を用いて説明する。5節は、結論である。

## 2 言表事態に対する基礎的な態度

本稿では終助詞の意味を、話し手の命題を把握する態度と、話し手が聞き手に命題を伝える態度で示すことになるわけだが、その前に、この節で、これらの態度を表すための基礎的な概念の定義を示す。

### 2.1 「知っている」「信じている」

終助詞の意味を定義するための基礎的な概念として、「知っている」「信じている」を定義する。

「信じている」の定義については、[Kat89]にある様相論理による定義を仮定する。しかし、「知っている」については、様相論理による定義では、次の式が問題になる。

$$(1) \textit{know}(a, p) \rightarrow p$$

この式は、「認知主体  $a$  が  $p$  知っているならば、 $p$  は真である」ということだが、ここで「真」というのは、公理論的体系の中での「真」であって、現実世界に立脚した真ではない。式(1)は、このままでは、「真」であることが、数学的に言えば公理系を体系付ける理論家、工学的に言えばシステムの設計者の知識に依存して決まることになる。しかし、現実の談話では、認知主体がある命題を「真」とするかどうか、すなわち「知っている」とするかどうかは、このような理論家や設計者が決めることではなく、個々の認知主体に依存して決まることである。従って、認知主体が何をもちて命題を「真」とするかが問題となる。以上のような考察により、本論文では式(1)を以下のように定義し直すことにする。

式(1)に代わる定義「 $a$  が  $p$  を知っている」とは、以下のいずれかが成立することである。

- $a$  が  $p$  で記述された状況を直接経験している
- $a$  が、直接経験によって得た情報と、一般的に通用している — 例えば科学的に立証された — 知識および推論によって、 $p$  を導ける

以下、「知っていること」を「知識」、「信じていること」を「信念」と呼ぶことにする。

### 2.2 「意識している」「意識し難い(し易い)」

本稿では、「意識している」「意識し難い(し易い)」という、「知っている」「信じている」に直交する概念を定義して用いる。まず、本稿で用いる認知主体記憶のモデルを示し、それに基づいて「意識している」「意識し難い(し易い)」を定義する。

#### 2.2.1 認知主体の記憶のモデル

一般に広く認められていることであるが、認知主体の記憶の領域には少なくとも二つの階層がある [Nom89]。本稿では、それぞれ、「短期記憶領域」「長期記憶領域」と呼ぶ。

短期記憶領域には、直観的に言うところの「齊一性」を持つものは全て「コト」になり得るとする。認知主体は、短期記憶領域にある情報は直接参照することが出来、また、短期記憶領域を直接書き換えることが出来る。

「短期記憶領域」にある情報は、認知主体が何かをするためにその場その場で「長期記憶領域」あるいは外界から得た情報である。これに対し、「長期記憶領域」には、認知主体が、常時、記憶しているコトが格納されている。認知主体が長期記憶領域の内容を参照したり更新する時は、長期記憶領域を直接変更するのではなく、短期記憶領域を経由して行なう。後述するが、長期記憶領域は、さらに、意識し易い情報が入った領域と、意識し難い情報が入った領域とに分けられる。

記憶領域を以下のように図示する。

	知識	信念	その他
短期記憶	a	b	c
長期記憶	d	e	f
	g	h	i

Fig. 2. 認知主体の記憶領域

まず、上下の方から説明する。aとbとcの領域は、短期記憶領域である。dとeとfの領域は、意識し易い情報のある長期記憶領域である。gとhとiの領域は、意識し難い情報のある長期記憶領域である。次に、左右について説明する。aとdとgの領域は、知識のある領域である。bとeとhの領域は、知識でない信念のある領域である。cとfとiの領域は、信念ですらない情報が記憶されている領域である。

## 2.2.2 「意識している」「意識し難い(し易い)」

本稿では、2.2.1で述べた短期記憶領域にある情報を「意識している」情報と呼ぶ。「意識している」は「知っている」「信じている」と直交する概念なので、例えば、「知識として意識している」情報や「信念として意識している」情報が存在する。

「知っている」「信じている」という概念は、「意識するまでにかかる手間」について全く考慮されていないが、終助詞の意味の定義にはこの手間の量を表す概念が必要である。そこで、本稿では、「長期記憶領域に有り、意識するまでにかかる手間の少ない」情報を「意識し易い情報」と呼び、「長期記憶領域に有るが、意識するまでにかかる手間の多い」情報と「元々、長期記憶領域に無く、記憶の外から新たに短期記憶領域に入ってきた情報」とを「意識し難い」情報と呼ぶ。

## 2.3 「確認する」

「認知主体 a が  $\phi$  を確認する」とは、「認知主体 a が  $\phi$  について推論して、知識として意識することと定義する。つまり、Fig 2. で a の領域に無かった情報を、計算して、a に持ってくることである。 $\phi$  は認知主体にとって、「知識として意識する」ために推論を要するようなコトでなければならない。

## 3 終助詞「ぞ」「ぜ」の意味

ここでは、前節で定義した諸概念を利用して終助詞「ぞ」「ぜ」の意味を検討する。

### (2) 「 $\phi$ -ぞ」の意味

- i. 話し手は  $\phi$  を知っている
- ii. V は  $\phi$  を確認せよ

ii. で、V は確認する人(以下、確認者と呼ぶ)である。(3)ではVが何になるかは決まっていないが、終助詞は話し手の発話時における態度を表すので、確認者Vは話し手が聞き手になり、第三者にはならない。i. より話し手は  $\phi$  を知識として意識しているので、文脈を無視する場合、確認者は話し手より聞き手になり易い。また、確認者Vが話し手になるためには、i. で話し手は既に  $\phi$  を(知識として)意識しているので、 $\phi$  は話し手にとって確認のために推論を要することでなければならない<sup>1</sup>。この例では、確認者は話し手ではなく聞き手となる。つまり、「眠いぞ」と言われた聞き手が、話し手が眠いことを確認し、結果としてそれなりの行為をすることが要請されることになる。以上のことを終助詞「ぞ」の確認者の指示者に関する性質として以下のようにまとめる。

### (3) 終助詞「ぞ」の確認者の性質

- i. 確認者は、話し手より聞き手になり易く、第三者にはならない。

<sup>1</sup> 確認者Vが聞き手になるためには、話し手の想像する聞き手の記憶のモデルの中で聞き手が  $\phi$  を意識していなければ、聞き手にとって推論を要することでなくとも良い。

- ii. 確認者が話し手になるためには、 $\phi$  は話し手にとって推論を要することでなければならない

### (4) 「 $\phi$ -ぜ」の意味

- i. 話し手は  $\phi$  を知っている
- ii. 話し手は「Cは  $\phi$  を信念として意識していない」と信じている

Cを「意識者」と呼ぶ。Cも文脈により定まるのだが、(2)の確認者Vと同様に、話し手が聞き手にしかならない。「 $\phi$ -ぜ」を話している話し手自身は発話時において  $\phi$  を意識している筈なのでCは話し手には殆んどならず、聞き手になり易い。しかし、「今まで  $\phi$  を意識していなかったが、突然知識として意識した」というような場合に限り、意識者Cは話し手にもなれる。このような場合、 $\phi$  は話し手にとって知識として意識するのに殆んど推論を要さないものである筈である。以上のことを、終助詞「ぜ」の意識者の性質として以下のようにまとめる。

### (5) 終助詞「ぜ」の意識者の性質

- i. 意識者は、話し手より聞き手になり易く、第三者にはならない。
- ii. 話し手が意識者になる時は、 $\phi$  が殆んど推論を要せずに知識として意識できるものに限られる

(2)ii. より、Cが聞き手になる場合、「 $\phi$  を信念として意識せよ」あるいは「 $\phi$  を信念とせよ」を語用論的に含意することになる。

「ぞ」「ぜ」と同様に肯定文を強調するようなニュアンスを持つ終助詞に「よ」があるが、その意味は以下のようになる[ON93]。

### (6) 「 $\phi$ -よ」の意味

- i.  $\phi$
- ii. 話し手は「聞き手は  $\phi$  を知識として意識していない」と信じている

(2)i.,(4)i. と(6)i. の違いに注意すべきである。(6)i. は、終助詞「ね」「な」のような従要素について話し手が確認できていないことを表す要素が続かなければ、あたかも「 $\phi$ 」と発話する時のように、話し手は  $\phi$  を知っていなければならない。(6)ii. より、「 $\phi$ -よ」「 $\phi$  を知識として意識せよ」あるいは「 $\phi$  を知識とせよ」を語用論的に含意することになる。

Vが聞き手の場合の終助詞「ぞ」は「聞き手は  $\phi$  を確認せよ(知識として意識せよ)」を意味論的に含意し、終助詞「よ」は「聞き手は  $\phi$  を知識として意識せよ」を語用論的に含意するのに対し、終助詞「ぜ」は「聞き手は  $\phi$  を信念として意識せよ」を語用論的に含意している。そのため、終助詞「ぜ」は、終助詞「ぞ」「よ」に比べて聞き手に対して情報を伝える力が弱く、「聞き手に仄めかす」ような表現になる。

#### 4 終助詞「ぞ」「ぜ」を含む文の意味

この章では、終助詞「ぞ」を含む文の読みが導かれる過程、特に文に含まれるゼロ代名詞の内容が特定される過程を、3節で述べた終助詞の意味を用いて説明する。例文には、終助詞の従要素となっている文の主要素が以下のものについて考える。

1. 判断詞「だ」
2. 主観形容詞
3. 動詞連用形+形容詞性接尾辞「たい」
4. 概言の助動詞「かも知れない」「に違いない」「(様態) そうだ」「ようだ」「らしい」「(伝聞) そうだ」
5. 終止形の動作動詞
6. 「だろう」を主要素とする文

##### 4.1 終助詞「ぞ」を含む文

以下の説明に出てくる確認者は(2)ii. によって導入される意味役割「確認者」のことである。

###### 4.1.1 判断詞「だ」

(7)  $\phi_{nom}$  学生だぞ。

$\phi_{nom}$  はゼロ主格とする。直観的に、読みは以下のようになる<sup>2</sup>。

{	第一の読み
	$\phi_{nom}$ = 話し手 確認者 = 聞き手
{	可能な読み 1
	$\phi_{nom}$ = 聞き手 ∨ 第三者 確認者 = 聞き手
{	可能な読み 2
	$\phi_{nom}$ = 話し手 ∨ 聞き手 ∨ 第三者 確認者 = 話し手

このことは、以下のように、説明できる。

1. 文(7)を発話する時、 $\phi_{nom}$  は主題となっているため、話し手も聞き手も  $\phi_{nom}$  に関わる状況を意識している。
2.  $\phi_{nom}$  が聞き手だとすると、聞き手は、普通、「聞き手は学生だ」という状況を知識として意識している筈である。よって、(2)i. より  $\phi_{nom}$  は聞き手にはなり難い(不可能ではない)。
3. (2)i. より、 $\phi$  は話し手の知っていることなので、 $\phi_{nom}$  は聞き手より第三者になり易く、第三者より話し手になり易い。
4. 話し手が学生かどうかは、普通、話し手には確認するほどのことではないので、(2)ii. より、確認者は聞き手になり易い。

<sup>2</sup>以下に出てくる「可能な読み」の後の番号は、それぞれを区別するためのもので、番号の順番には意味はない。

##### 4.1.2 主観形容詞

(8)  $\phi_{exp}$  眠いぞ。

ただし、 $\phi_{exp}$  は経験者という意味役割を表すゼロ代名詞とする。この文は直観的に、以下の読みになり易いと思われる。

{	第一の読み
	$\phi_{exp}$ = * 確認者 = 聞き手
	可能な読み 1
{	$\phi_{exp}$ = * 確認者 = 話し手
	可能な読み 2
{	$\phi_{exp}$ = 話し手 確認者 = 聞き手

\* は「全ての人」を意味し、主観形容詞が感情的品定め用法<sup>3</sup>になることを表す。文(8)は主観的な読みより感情的品定め読みの方が強いに感じられる。また、主観的な読みになる時、 $\phi_{exp}$ 、確認者の組合せは上記の三組目のようにしかならないと思われる。これらのことは以下のように説明できる。

1. (2)i. より  $\phi$  (「 $\phi_{exp}$  眠い」) は話し手の知っていることでなければならぬのだが、「眠い」が主観的な用法で用いられているとすると、主観的经验はその経験者にしか分からないので  $\phi_{exp}$  は話し手にしかならない。
2. 「(話し手が) 眠い」の場合、このことは話し手の知覚で、(3)ii. より確認者を話し手にすることは出来ない。よって、確認者は聞き手になる。しかし、話し手の主観を聞き手が確認することは出来ないので、この読みをしようとする押しつけがましく感じられる。
3. 「眠い」を感情的品定め用法とすると、2. で説明したような押しつけがましさが生じないので、主観形容詞「眠い」は主観的な用法より感情的品定め用法になり易い。
4. 「(一般に誰でも) 眠い」の場合は、確認者を話し手にも聞き手にも出来るが、この場合は(3)i. より話し手より聞き手になり易い。

(9)  $\phi_{exp}$  欲しいぞ。

この文の読みは、直観的には以下のようにならない。

$\phi_{exp}$  = 話し手 確認者 = 聞き手

「欲しい」には感情的品定め用法が無いので、この文はこの読みにならない。この文は押しつけがましく感じられるが、その理由は文(8)についての説明の2. と同様である。

<sup>3</sup>殆んどの主観形容詞は、例えば主観形容詞「眠い」のように、「なんだか眠いな」のような主観的な用法の他に「あの授業は眠い」のような性状規定の用法を持つ。後者の用法を「感情的品定め」の用法という。「欲しい」「憎い」のように「感情的品定め」の用法を持たない主観形容詞もある [Ter82]。

4.1.3 「…たい」

(10)  $\phi_{exp}$  帰りたいぞ。

「動詞連用形+たい」は文法的には主観形容詞と同様であるが、感情的品定め用法は無い。そのため、この文の読みは文(9)のそれと同じになる。また、この文が押しつけがましく感じられる理由も文(9)と同様である。

4.1.4 概言の助動詞

動詞の概言形に終助詞「ぞ」が付加することは稀で、助動詞「だろう」の直後に終助詞「ぞ」が付加することは無い。しかし、[Ter84]で紹介されている概言の助動詞の内の「だろう」以外のものは、終助詞「ぞ」が直接付加することが出来る。ここでは、概言の助動詞、「かも知れない」「に違いない」「(様態) そうだ」「ようだ」「らしい」「そうだ」に終助詞「ぞ」が付加したものを述部とする文について考える。[Mor89]にもあるように、 $\Pi$ を概言の助動詞の従要素とすると、これらの「 $\Pi$ -(概言の助動詞)」は、基本的には、

- 「かも知れない」「に違いない」は $\Pi$ が真である可能性の判断
- 「(様態) そうだ」「ようだ」「らしい」は $\Pi$ の根拠となり得る状況の把握
- 「らしい」「(伝聞) そうだ」は $\Pi$ で表される情報の把握

を表す確言的表現で、結果的に $\Pi$ に関する概言的表現となるものである。そのため、これらの助動詞の後には終助詞「ぞ」が付くことが出来る。概言の助動詞は、その従要素となっている命題を認知した者を導入する。この認知者は観察者という意味役割を持ち、通常は話し手である。

(11) 太郎は来るかも知れないぞ。

(12) 太郎は来 そうだぞ。

直観的な読みは以下のようになる。

第一の読み	観察者 = 話し手	確認者 = 聞き手
可能な読み	観察者 = 話し手	確認者 = 話し手

(2)iより、 $\emptyset$ (=「太郎は…かも知れない/そうだ」)を話し手は知らなければならないので、概言の助動詞の観察者は話し手にしかならない。観察者については、この後に出てくる他の概言の助動詞についても同様である。さらに、(3)iより、確認者は話し手より聞き手になり易い。

(13) 太郎は来る に違いないぞ。

(14) 太郎は来る ようだぞ。

(15) 太郎は来る らしいぞ。

直観的な読みは以下のようになる。

観察者 = 話し手      確認者 = 聞き手

観察者については、文(11),(12)と同様である。しかし、確認者は、文(11),(12)と違い、話し手にはなり難い。これは、「に違いない」「ようだ」「らしい」の意味に「観察者は推論の結果、このような結論に達した」という意味があり、これは話し手の確認作業であるため、終助詞「ぞ」の確認者を話し手にすると冗長になるからである。

伝聞の助動詞は、direct informee, direct informer という意味役割を持つ。direct informeeは伝聞の助動詞の従要素となっている情報を直接受け取った認知主体である。また、direct informerはこの情報を直接 direct informeeに伝えた認知主体である。direct informer, direct informeeをそれぞれ $\phi_{dir\ inf}$ ,  $\phi_{dir\ inf}$ と書くことにする。

(16) 太郎は来る らしい(伝聞)ぞ。

(17) 太郎は来る そうだぞ。

$\phi_{dir\ inf}$	≠	話し手	∨	聞き手
$\phi_{dir\ inf}$	=	話し手		
確認者	=	聞き手		

このことは以下のように説明できる。

1. 話し手は $\emptyset$ (「太郎は来るそうだ」)を知らなければならないので、direct informeeは話し手にしかならない
2. direct informeeが話し手だからdirect informerは話し手ではない。また、聞き手は $\emptyset$ を知らない筈なので、direct informerが聞き手になることもない。
3. 「そうだ」は「ある予想について自分は直接知らないが、他からこう伝え聞いたと言うことを相手に伝える言い方」[Ter84]である。日本語文はその性質上、このような聞き手目当ての態度の後には、開けて目当ての態度を表す要素しか来れないので、確認者は聞き手にしかならない。「らしい」の場合も同様である

4.1.5 動作動詞終止形

一般に、動作主は話し手、受動者は聞き手になり易い。

(18)  $\phi_{agt}$   $\phi_{pat}$  殺すぞ。

$\phi_{agt}$ ,  $\phi_{pat}$ はそれぞれ動作主、受動者という意味役割を表すゼロ代名詞とする。

第一の読み	$\phi_{agt}$ = 話し手	確認者 = 聞き手
	$\phi_{pat}$ = 聞き手	
可能な読み1	$\phi_{agt}$ = 話し手	確認者 = 聞き手
	$\phi_{pat}$ = 第三者 ∨ 話し手	
可能な読み2	$\phi_{agt}$ = 話し手	確認者 = 話し手
	$\phi_{pat}$ = 第三者 ∨ 話し手	

これらのことは、以下のように説明する。

1.  $\emptyset$  は「(未来のある時点に) $\phi_{agt}$   $\phi_{pat}$  殺す(という動作が存在する)」ということであるから、(2)i. より、 $\phi_{agt}$  は、聞き手より第三者に、第三者より話し手になりやすい。
2. (3)i. より、確認者は話し手より聞き手になり易い。
3. (2)ii. より、「聞き手は『 $\phi_{pat}$  殺す』を確認せよ」ということになるが、 $\phi_{pat}$  が聞き手の場合が最も聞き手が確認しやすいので、 $\phi_{pat}$  は聞き手になり易い。

## 4.2 終助詞「ぜ」を含む文

### 4.2.1 判断詞「だ」

(19)  $\phi_{nom}$  学生だぜ。

直観的に、この文の読みは、以下ようになる。

第一の読み	$\left\{ \begin{array}{l} \phi_{nom} = \text{第三者} \vee \text{話し手} \\ \text{意識者} = \text{聞き手} \end{array} \right.$
可能な読み 1	
可能な読み 2	$\left\{ \begin{array}{l} \phi_{nom} = \text{聞き手} \\ \text{意識者} = \text{聞き手} \\ \phi_{nom} = \text{話し手} \\ \text{意識者} = \text{話し手} \end{array} \right.$

文(7)は(2)i. により  $\phi_{nom}$  が聞き手になり難かったわけだが、(4)i. と(2)i. は同じなので、文(19)も同様に  $\phi_{nom}$  が聞き手になり難い。また、(5)より、意識者は話し手より聞き手になり易い。「話し手が意識していなかった『 $\phi_{nom}$  は学生だ』を突然、知識として意識した」というような場合は意識者は話し手にもなり得るが、その場合、(5)ii. より「 $\phi_{nom}$  は学生だ」は殆んど推量を要さないものであるはずだから、 $\phi_{nom}$  は話し手に限られる。

### 4.2.2 主観形容詞

(20)  $\phi_{exp}$  眠いぜ。

この文は直観的に、以下の読みになると思われる。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{第一の読み} \\ \phi_{exp} = * \quad \text{意識者} = \text{聞き手} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{可能な読み 1} \\ \phi_{exp} = \text{話し手} \quad \text{意識者} = \text{聞き手} \end{array} \right.$

これらのことは以下のように説明できる。

1. 文(20)が主観的な読みになる場合、主観的経験はその経験者にしか分からないので、(4)i. より、 $\phi_{exp}$  は話し手にしかならない。
2. (5)i. より、意識者は話し手より聞き手になり易い。
3. 意識者が話し手になる場合、(5)ii. より「 $\phi_{exp}$  眠い」は推量を殆んど要さないことである筈なので、 $\phi_{exp}$  は話し手に限られる。

主観形容詞が主観的な用法より感情的品定め用法になり易い理由は、まだ説明できていない。

(21)  $\phi_{exp}$  欲しいぜ。

この文は直観的に、以下の読みになると思われる。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{第一の読み} \\ \phi_{exp} = \text{話し手} \quad \text{意識者} = \text{聞き手} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{可能な読み} \\ \phi_{exp} = \text{話し手} \quad \text{意識者} = \text{話し手} \end{array} \right.$

「欲しい」という主観述語には感情的品定め用法が無く、(4)i. より話し手は「 $\phi_{exp}$  欲しい」を知っていなければならないので、 $\phi_{exp}$  が話し手になる主観的な読みしかない。また、(5)i. より意識者は話し手より聞き手になりやすいので、文(21)は上記のような意味になる。

### 4.2.3 「…たい」

(22)  $\phi_{exp}$  帰りたいぜ。

文(9)の説明で述べたように「帰りたい」は感情的品定めにならない主観形容詞と同様の意味になる。そのため、読みは文(21)と同様で、その理由も文(21)と同様である。

### 4.2.4 概言の助動詞

(23) 太郎は来るかも知れないぜ。

(24) 太郎は来るに違いないぜ。

(25) 太郎は来るようだぜ。

(26) 太郎は来るらしいぜ。

これらの文の直観的な読みは以下ようになる。

観察者 = 話し手      意識者 = 聞き手

終助詞「ぜ」の従要素が概言の助動詞を主要素とする文の場合、(4)i. より、話し手は  $\emptyset$  を知っているので、 $\phi_{obs}$  は話し手にしかならない。このことは、他の「(概言の助動詞)+ぜ」についても同様である。また、「かも知れない」「に違いない」「ようだ」「(状況把握)らしい」は、推量を含意するので、(5)ii. より意識者は話し手にはならない。

(27) 太郎は来そうだぜ。

この文の直観的な読みは以下ようになる。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{第一の読み} \\ \text{観察者} = \text{話し手} \quad \text{意識者} = \text{聞き手} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{可能な読み} \\ \text{観察者} = \text{話し手} \quad \text{意識者} = \text{話し手} \end{array} \right.$

この文の場合、意識していなかった「太郎は来そうだ」を突然知識として意識することはあり得るので、意識者は話し手にもなり得る。(5)i. より、意識者は話し手より聞き手になり易い。

(28) 太郎は来るらしい(伝聞)ぜ。

(29) 太郎は来るそうだぜ。

これらの文の読みは以下ようになる。

{	$\phi_{dir\ fr}$ ≠ 話し手 ∨ 聞き手
	$\phi_{dir\ fe}$ = 話し手
	意識者 = 聞き手

このことは以下のように説明できる。

1. 話し手は $\emptyset$ （「太郎は来るそうだ」）を知らなければならぬので、direct informee は話し手にしかならない
2. direct informee が話し手だから direct informer は話し手ではない。また、聞き手は $\emptyset$ を知らないことであるべきなので、direct informer が聞き手になることもない。
3. 文(17)の説明のところでも述べたように、「そうだ」は聞き手目当ての態度を表すので、終助詞「ぜ」も聞いて目当ての態度を表す。そのため、意識者は聞き手にしかならない。

#### 4.2.5 動作動詞終止形

一般に、動作主は話し手、受動者は第三者になり易い。

(30)  $\phi_{agt} \phi_{pat}$  殺すぜ。

{	第一の読み		
	$\phi_{agt}$ = 話し手	意識者 =	聞き手
{	$\phi_{pat}$ = 第三者		
	可能な読み2		
{	$\phi_{agt}$ = 話し手	意識者 =	聞き手
	$\phi_{pat}$ = 聞き手 ∨ 話し手		

これらのことは、以下のように説明する。

1. (2)i. と (4)i. は同じなので、文(18)の説明の1. と同様の理由で、動作主は話し手になり易い。
2.  $\emptyset$  (=「殺す」) は未来のある時点のことなので、意識するのに推量を要する。よって、話し手は既に「殺す」という意思を意識しているから、これからそのことを意識して貰う意識者は話し手にはならない。

受動者が第三者になり易い理由は、3節で説明したような、終助詞「ぜ」の「意識者に $\emptyset$ を仄めかす」働きからだとと思われるが、まだ、十分な説明が出来ない。

#### 4.3 「だろう」と「ぞ」「ぜ」

疑問文を作ることの出来る終助詞「か」や疑似疑問文[Nit91]を作ることの出来る終助詞「ね」「な」は「だろう」に付加することがき、そのような表現は頻繁に用いられる。

(31) 太郎は学生だろう か/ね/な。

これに対し、「ぞ」は付加することが出来ない。

(32) \* 太郎は学生だろう ぞ。

「よ」「ぜ」は付加することが出来るが、「だろう+か/な/ね」ほど頻繁には用いられず、しかも、「だろう+よ/ぜ」はどちらも投げやりな表現である。

このような現象を以下で検討する。まず、[Mor89, Ter84, Mas91, Nit91]の説明を総合して、「だろう」は以下のような意味であるとする。

#### 「II-だろう」の意味

- 推論の結果、話し手はIIを信じているが確認できない

(33) 太郎は来る だろう。

この文は、直観的には、「話し手は推量の結果『太郎は来る』を信念として意識したが、確認できない」ということである。

(34) 太郎は来る だろう か。

「 $\emptyset$ -か」の意味は、以下のようなものである [TSS+90]。

#### 「 $\emptyset$ -か」の意味

- 話し手には $\emptyset$ が分からない

この文は、文(33)が分からない、つまり直観的には、「『太郎は来る』は本当に確認できないかどうか分からない」ということを表す。

(35) 太郎は来る だろう な。

「 $\emptyset$ -な」の意味は、以下のようなものである [ON93]。

#### 「 $\emptyset$ -な」の意味

- 話し手には $\emptyset$ は信念として意識し難い

この文は、文(33)を信念として意識し難い、つまり直観的には、「『太郎は来る』が確認できない、ということを感じるのに手間がかかった」ということを表す。

(36) 太郎は来る だろう ね。

「 $\emptyset$ -ね」の意味は、以下のようなものである [ON93]。

#### 「 $\emptyset$ -ね」の意味

- a. 話し手には $\emptyset$ は信念として意識し難い
- b. 話し手は、聞き手は発話後に $\emptyset$ を信念として意識している、と信じている

この文は、文(33)を信念として意識し難い、つまり直観的には、「『太郎は来る』が確認できない、ということを感じるのに手間がかかった」と同時に、「話し手が確認できなかったことを聞き手は信じてくれる、と期待している」ということを表す。「 $\emptyset$ -ね」の意味のb.により、話し手は「聞き手は『だろう』で表される話し手の推論をシミュレートしてくれる」という期待をしていることになる。

(37) 太郎は来る だろう よ。

この文は、(6)i. により文(33)をそのまま伝えると同時に、(6)ii. により聞き手に「だろう」で表される話し手の推論、すなわち話し手には「太郎は来る」ことを確認できなかったということ、を、「知識として意識する」ことを目標としてシミュレートすることを促すことになる。つまり、話し手に、やっても確認出来ないことを暗に促し、「どうせお前にも出来やしない」と言っているようになる。そのため、「だろうよ」は投げやりな感じを持つ表現になる。

(38) 太郎は来る だろう ぜ。

まず、「だろう」は話し手の推論を表すので、(5)ii. より意識者は聞き手にしかならない。この文は、(4)i. により文(33)は話し手の知識である、と主張すると同時に、(4)ii. により聞き手に「だろう」で表される話し手の推論を、「信念として意識する」ことを目標としてシミュレートすることを促すことになる。「だろうよ」のように「知識として意識する」ことを促しているわけではないので、「だろうよ」よりは押しつけがましさが弱い。

(39) \*太郎は来る だろう ぞ。

まず、確認者を話し手とすると、「 $\emptyset$ -だろう」の意味には、「『 $\emptyset$ は確認できない』ことを確認した」を含むため、この後に終助詞「ぞ」が来ると確認が重なって冗長になる。よって、確認者は話し手にはならない。次に、確認者を聞き手とすると、この文は、(2)i. により文(33)は話し手の知識である、と主張すると同時に、(2)ii. により聞き手に「だろう」で表される話し手の推論を、シミュレートして確認することを陽に命じることになる。しかし、話し手の主観的経験は話し手にしか知ることが出来ない(確認することも出来ない)、聞き手にこの確認は不可能であり、話し手の要求は矛盾している。そのため、このような表現は出来ない。

## 5 おわりに

本稿では、終助詞の意味論について、特に終助詞「ぞ」「ぜ」を中心に、検討してみた。本稿で提案した意味で終助詞「ぞ」「ぜ」を持つ幾つかの文の意味を説明することが出来た。今後は、主張型以外の文(命令文など)と終助詞の関係、本稿で検討していない他の終助詞の意味論、終助詞間の共起関係等の言語学的な問題と、終助詞の意味の計算モデルの構築と機械上での実現という問題を、さらに検討する予定である。

## 参考文献

- [Gun89] 郡司隆男. 句構造文法の形式化と機械処理との関連性. 文部省特定研究「言語処理の高度化」報告資料, pp. 1161-1168, 1989.
- [Has72] 橋本武. 中学生のやさしい文法 — ことばのきまり —. 学燈社, 東京, 第三十四版, 6 1972.
- [Kam90] 神尾昭雄. 情報の縄張り理論. 大修館書店, 東京, 初版, 5 1990.
- [Kat89] 片桐恭弘. 文脈理解のモデル. 情報処理, Vol. 30, No. 10, pp. 1199-1206, 10 1989.
- [Kaw91] 川森雅仁. 終助詞と認知様相. 情報処理学会自然言語処理研究会報告 84-6. 社団法人 情報処理学会, 1991.
- [Kin93] 金水敏. 言語学の最新情報 <日本語学>. 月刊言語, Vol. 22, No. 4, pp. 118-121, 4 1993.
- [Mas91] 益岡隆志. モダリティの文法. くろしお出版, 東京, 1991.
- [Mat69] 松村明(編). 古典語現代語助詞助動詞詳説. 学燈社, 東京, 4 1969.
- [Mor80] 森田良行. 基礎日本語 2— 意味と使い方. 角川書店, 東京, 1980.
- [Mor89] 森山卓郎. 認識のムードとその周辺. 日本語のモダリティ, pp. 57-120. ひつじ書房, 東京, 第二版, 8 1989.
- [Nit91] 仁田義雄. 日本語のモダリティと人称. ひつじ書房, 東京, 第三版, 9 1991.
- [Nom89] 野村浩郷. 自然言語理解の構造 — 理解の表現. 情報処理, Vol. 30, No. 10, pp. 1161-1168, 10 1989.
- [ON93] Susumu Ono and Hiroshi Nakagawa. Semantics of Japanese sentence final particles— about *ne, yo* and *na*—. In *Natural Language Processing Pacific Rim Symposium-93*, 1993.
- [Shi91] 白井賢一郎. 自然言語の意味論 — モンタギューから「状況」への展開 —. 産業図書, 東京, 初版, 4 1991.
- [Tak89] 田窪行則. 文脈のための言語理解. 情報処理, Vol. 30, No. 10, pp. 1191-1198, 10 1989.
- [Ter82] 寺村秀夫. 日本語のシンタクスと意味 I. くろしお出版, 東京, 第五版, 9 1982.
- [Ter84] 寺村秀夫. 日本語のシンタクスと意味 II. くろしお出版, 東京, 第八版, 9 1984.
- [TK92] 田窪行則, 金水敏, 定延利之. 自然言語における対話管理機構について. 1992.
- [TSS+90] 土屋俊, 白井賢一郎, 鈴木浩之, 川森雅仁, 今仁生美. 日本語の意味論をもとめて. 月刊言語, Vol. 19, No. 1-12, 1990.
- [Yam86] 山梨正明. 発話行為. 新英文法選書, 第 12 巻. 大修館書店, 東京, 初版, 7 1986.